

幕末と明治維新後の英米留学にみる
先人達の軌跡と近代日本国家への貢献について
— 長州五傑と木村熊二を中心として —

Historical Contributions to Modern Japan
Through Overseas Study:
The Choshu Five and Kimura Kumaji
Before and After the Meiji Restoration

中嶋アンディ史人 仁科 恭徳

NAKAJIMA A. Fumihito NISHINA Yasunori

投稿日：2023年5月16日
受理日：2023年9月15日

(要約)

本稿では、海外留学が一般化し普及している現在において、今一度その海外留学の原点（つまり日本と海外の架け橋）となった先人達について文献及び先行研究をレビューすることとする。特に、日本の近代社会・文化を築く上で多大に影響を及ぼした人物の中でも、幕末に英米留学を試みた先人達、ここでは長州五傑と木村熊二及びその周辺の人物における足跡と、その貢献・影響などをまとめ、その内容を批判的に考察する。

キーワード：留学、幕末、明治時代、英国、米国

1. 序論

1.1. はじめに：日本における海外留学のニーズ

神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部英語コース（以下、英語コース）では、2015年の学部開設当時から「神戸から世界に」をテーマに、現在まで多くの学生をアメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダ、ニュージーランドなどに派遣してきた¹。大学業界におけるこのような留学支援やそれに関連する取り組みは、コロナ禍以前に需要の高かったグローバル人材育成教育の一環でもある。本学部が開設された当時は、本学のみならず大学業界の全体的な流れとして、海外留学を全面的に打ち出した国際・グローバル系学部が軒並み増設される傾向にあった。これは、学生の留学に対する憧れやニーズに応えるという理由がある一方で、大学全入時代を迎えるにあたり、激化する学生獲得競争の中で各大学が生き残る術でもあった。

まず、日本社会における海外留学のニーズを実際にデータで見てみよう。図1は2022年3月に独立行政法人日本学生支援機構が公開した2020（令和2）年度日本人学生留学状況調査結果からの一部抜粋であり、日本人留学生数の推移状況を示している。コロナ禍以前までは、海外へ飛び立つ日本人留学生の数が順調に伸びていることが分かる。2003年度の15,564人からコロナ禍前のピーク時となる2018年度には115,146人にまで増え、当初の約7.4倍にまで膨れ上がっている²。英語コースにおいても、今年度からは本格的に渡航留学が再開された。今後は、日本社会全体として、コロナ禍以前のレベルにまで日本人留学生の数が回復することが期待されている。

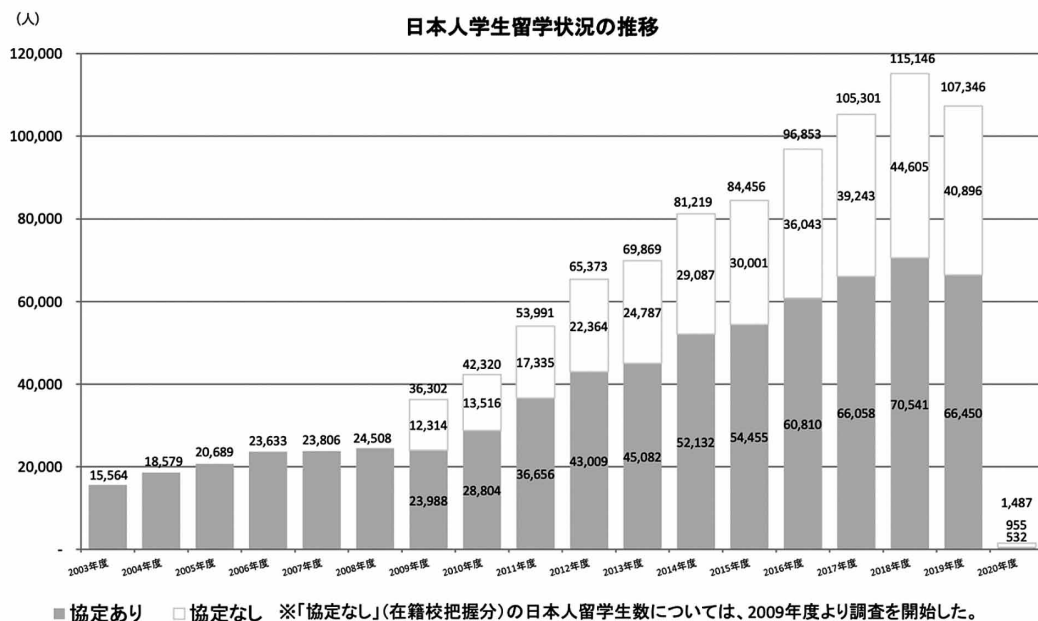


図1. 日本人学生留学状況の推移（日本学生支援機構（2022, p.3）より抜粋）

1.2. 本稿の目的

本稿では、このように海外留学が一般化し普及している現在において、今一度その海外留学の原点（つまり日本と海外の架け橋）となった先人達について文献及び先行研究を振り返ることとする。

特に、日本の近代社会・文化を築く上で多大に影響を及ぼした人物の中でも、幕末に英米留学を試みた先人達の足跡とその貢献・影響などをまとめ、その内容を批判的に考察する³。

本稿の前半で取り上げる長州五傑は、1863年に英国ロンドン大学（University College London、以下 UCL）⁴に留学した長州藩の5名の藩士であり、井上聞多（後に井上馨）、遠藤謹助、山尾庸三、伊藤俊輔（後に伊藤博文）、野村弥吉（後に井上勝）がこれらにあたる。5年間の契約で密航し英国の地で学んだ彼らの姿は、萩市・下関市の協力を得て制作された映画『長州ファイブ』（2006）において見事に描かれている⁵。また、本稿の後半で取り上げる木村熊二は、英語コースの留学先のひとつである米国ミシガン州ホーランド市に位置するホープカレッジに1871年に留学し、同大学で8年間過ごしたという記録がある（全渡米期間は12年間）⁶。

日本人の西洋への渡航自体は、16世紀中葉あたりが初めとされている。但し、当時は、自らの意志とは反した漁師などの遭難や漂流、あるいはフランシスコ・ザビエルが日本を去る時に5名の日本人を同行させた例なども含めて、偶然あるいは宗教色の強い渡航であったことが伺える（詳しくは、富田（2005）を参照）。そのような中で、自らの意志で英米留学した長州五傑や木村熊二の足跡を当時の情勢も考慮しながら概観し批判的に考察することで、幕末前後の日本と英米との文化的・社会的ギャップを目の当たりにした先人達が、差別や言語等で苦勞しながらも異国で果敢に学び、異文化を体験する姿を知ることは、今後のグローバル化が進む大学教育・社会においても重要なことであろう⁷。長州五傑は倒幕派で木村熊二は佐幕派であったが、共に開かれた日本の未来を夢見ながら留学生活を送る中で、相反する派閥が奇しくも欧米に追いつくべく日本の近代化に向けて同じ方向へと向かっていくその姿には、運命に近いものを感じる。本論では、その一端を紹介したい。

2. 長州五傑の英国留学

2.1. UCL との関わり

まず、第2節では、日本人の英国留学の本格的な幕開けとなった出来事について触れたい。英国で、はじめに日本人留学生を積極的に受け入れたのはUCLである。宗教や人種、性差に開かれた大学として1826年にUCLは創立された。全寮制ではなく通学制であったことから、当時は、他大学に比べて学費が安価であった（放送大学、2013）。自然科学者チャールズ・ダーウィンが1859年に種の起源を発表したことで有名なこの大学で長州五傑を迎え入れたのは、後に「日本の恩人」と称される英国の化学者アレキサンダー・ウィリアム・ウィリアムソン（Alexander William Williamson, 1824~1904）であった（犬塚、2015）。妻エマ・キャサリン夫人の献身的な協力もあり、1863年に長州藩からの留学生5名（つまり長州五傑）と、1865年に薩摩藩からの留学生である五代友厚、寺島宗則、森有礼らを含む計19名（内訳：15名の薩摩藩士と4名の視察員（3名の使節と1名の通訳））を受け入れ、自宅に下宿させるなどして手厚く世話をした（菊池、2020）⁸。

これをきっかけに、その後もUCLは多くの日本人を惹きつけることとなる。例えば、明治維新後には、土佐藩出身の馬場辰猪や片岡健吉もウィリアムソン夫妻が創始した日英交流の一端を担っている。他にも夏目漱石や小泉純一郎などもUCLで学んだ経験がある。なお、2013年には長州五傑が来英してから150周年を迎えたことから、その記念式典が日本と英国で執り行われ、2014年には当時の首相であった安倍元総理がUCLを訪問している（外務省、2014; 日本経済新聞、2014）⁹。



写真 1. UCL 敷地内に 1993 年に建立された記念碑（第二著者により現地撮影）¹⁰

2.2. 長州五傑の英国留学

当時、国禁とされた海外留学を執行したことから、長州五傑には並々ならぬ覚悟があったことが分かる（犬塚（2015, p.88）では「決死行」と表現されている）。また、海外経験や留学の必要性を理解していた毛利藩の先見の明も素晴らしいと言えよう。もちろん現在とは比較にならないほど日数のかかる渡航であったが、記録では、日本を出国してから上海を経て英国に到着するまでに、約 130 日かかったとある（藤井，1990）。上海からロンドンまでの行程において 5 人全員が同じ船に乗船したわけではなく、井上と伊藤は 300 トン程の小さな船に乗り、残りの 3 人はもう少し大きな船でロンドンに向かったようである（犬塚，2015）。

また、英国で何を学びたいのかという問いに対して、navy（海軍学）と答えたつもりが navigation（航海術）と伝わったために、船中で手荒な扱い（水夫同様の扱い）を受けたというエピソードもある（犬塚，2015）。Mrs. Matheson の回顧も参考にしている藤井（1990）によれば、当初、長州五傑の中では野村のみが少しブロークンな英語を話せたようである¹¹。今日のように英語教育が普及しておらず、ましてパソコンやインターネットのような科学技術もない時代において、海外への渡航がどれほど不安に満ちたものであったのかは想像に難くない。英和辞典の原点を『英和对訳袖珍辞書』（1862）と見るのであれば（南出，1998）、ようやく英語の重要性に国が気づきその施策に本格的に動き出した時期であり、今日のように一般的に英語教育が普及していなかった時代と見てよいであろう。また、上記の辞書についても当時はあまりにも高額で、一般人には手の届かない代物であったという記録もある（南出，1998; 大槻，1888）¹²。

攘夷派長州藩士である 5 人の世話役を引き受けてくれたのは、当時の英国最大の商社であるジャーデン・マセソン商会である（犬塚，2015）。英国に到着して間もなく、一行は UCL 法文学部の聴講生として英国留学を開始することになる。犬塚（2015）によれば、これら日本人留学生 5

人の教育については、「ウィリアムの指導するバークベック実験室を中心に行われた」(p.105)と綴られており、「朝晩はウィリアムの家で英語や数学を勉強し、昼間はカレッジへ行って実験室で授業を受ける」(p.106)という毎日を過ごしていたようである。大学の授業の合間の時間を使って、積極的に造幣局や製造工場、博物館や美術館などにも足繁く通ったようである。翌年の1864年には、早々にも日本と連合国（イギリス、フランス、アメリカ、オランダ）との戦争勃発にも発展しかねない報道を受け、井上と伊藤が急遽帰国することになったが、その代わりに1865年には長州藩から南貞助、竹田備次郎、山崎小三郎の3名が派遣されることになる。また、既に述べたとおり、当時敵対していた薩摩藩からも19名が派遣されることになる（薩摩留学生については次節を参照）。

実際には日本に帰国できぬままロンドンの地で亡くなった者もいるが（山崎）、英国留学を経て帰国した者達は皆、日本の社会を支え先導すべく各方面で活躍することになる。映画『長州ファイブ』（2006）の主人公でもある山尾庸三（1837-1917）は、分析化学（Analytical Chemistry）をはじめに学び¹³、その後に土木工学（Civil Engineering）の授業も履修している¹⁴。また、UCLのみならず、ロンドンから遠く離れたグラスゴーにおいても昼間はNapier（ネイピア）造船所で実地修行をし、夜にはアンダーソン・カレッジの夜間学級に通い、2年後に帰国する。帰国後に工部大学校を発足し、東京帝大工学部を開き、日本の工学教育に大きく貢献したことから、その後、工業教育・人材育成の父とまで言われるようになった（藤井，1990）。説明の必要はないと思われるが、他のメンバーについても、伊藤博文（1841-1909）は初代内閣総理大臣となり、井上馨（1836-1915）は初代外務大臣となった。井上勝（1843-1910）は、京阪神間の鉄道建設に尽力し、内務省鉄道長官となり、日本の鉄道の父と称されるまでになる。遠藤謹助（1836-1893）は、大阪の造幣局の立ち上げに携わり造幣技術の立役者となった。なお、初代の日本人留学生を献身的に世話したウィリアムソン教授夫妻は、山崎を含めロンドンで没した4名の日本人留学生と共にロンドン郊外のBrookwood Cemetery（ブルックウッド墓地）¹⁵に眠っている。

2.3. 薩摩藩士の英国留学

薩摩藩士19名についても少しだけ触れておこう。薩摩藩は、島津斉彬（1809 - 1858）が藩主の時から密かに留学生海外派遣構想を温めていた。その後、薩英戦争での英国の軍事力を目の当たりにし、世界の先進的な技術や文化を学ぶべきだと強く感じた五代友厚が、和平交渉の席で英国側に留学生の派遣計画を提案し、13歳から33歳までの20歳前後を中心とする19名を独自基準で選考し、無事派遣することになる（内訳は、帰国後に初代駐米公使・初代文部大臣となる森有礼、帝国博物館の初代館長となる町田久成などを含む留学生15名、視察員3名、通訳1名を派遣。3名の攘夷、2名の薩摩藩外の者も含まれる）（犬塚，2015などを参照）。これら留学生は幕府を恐れて全員改名した上で渡航することになる。航海期間は約2ヶ月間と長州五傑が経験した期間よりも短い（4月17日に申木野郷羽島浦（現鹿児島県いちき串木野市羽島）を出発、6月21日にサウサンプトン港へ到着）。留学生のうち14名は、長州五傑と同じくUCLの聴講生となり、長沢鼎はその若さからスコットランドアバディーンの中学へ入学する。この中で唯一日本に帰国しなかったのは長沢のみである。UCLでは先輩にあたる長州藩士3名との交流の記録もある。1866年前後から薩摩藩からの送金が途絶えがちであったこともあり、町田をはじめ日本への帰国者が目立つようになる。帰国後のこれら留学生の活躍ぶりは顕著であり、博物館の創設や教育、鉱山、外交、海軍などの多様な分野で成功

している（富田, 2005; Embassy of Japan in the UK 2015; 大和日英基金, 2016などを参照）。

3. 木村熊二の生涯

3.1. 生い立ちと渡米までの背景

次に、第3節では、日本人の米国留学の先駆けでもある木村熊二の足跡を辿り、留学後の活躍についても紹介したい。櫻井（のちの木村）熊二（1845-1927）は、現在の兵庫県豊岡市を治めた出石藩の儒官、櫻井一太郎の二男として生まれた。熊二が5歳の時に一太郎が死亡したため、江戸にいる叔父で御普請役の櫻井三郎を頼って江戸に出ることになる。ペリー艦隊が江戸湾を訪れた1853年のことであった。ところが、翌年、その叔父も他界してしまう。

その後、10歳になった熊二は漢学者木村琶山の養子となり、木村姓を名乗ることとなる。琶山は熊二を昌平黌（昌平坂学問所）に送り、漢文と儒学を学ばせた。熊二は12歳で同心となり、江戸の警備にあたったが、この頃から反幕府軍との小競り合いが多発し、江戸は緊張状態が続いた。後に箱館奉行支配定役を任せられ、21歳の時に、田口鏡子（1848-1886）を妻に迎えた¹⁶。結婚後間もなく、長州征伐に参加することとなり、歩兵指図役並等を任せられる。この後、勝海舟の配下となり、新選組の近藤勇らと共に京都で倒幕派の探索にもあたった。1868年に彰義隊に加わり、戦の敗退を経験し、旧幕府軍が身を寄せた静岡に家族と共に暮らすこととなる（小山, 1996）。

反新体制派となり、先が見えない中にいた木村熊二に希望の光を与えたのは、留学生として米国に渡ることだった¹⁷。資金面、渡航の手続き、身元保証人として3人の偉大な人物が木村を支援することになる。のちの東大総長となる外山正一（1848-1900）、江戸時代と明治時代を結んだ勝海舟（1823-1899）、そして前節に挙げられた森有礼であった。薩摩藩士であった森が、佐幕派の木村を自らの米国渡航団に加えたのは、木村の留学への熱い思いからだけではなく、将来ある学者と見抜いた森の慧眼であった。木村は「知己人名録」の中で自らに影響を与えた人物として、勝海舟に続いてこの森有礼の名前を挙げている。「鹿兒島県の人、米国に予を伴ひたる人なり 洋行中常に予を愛顧せり」との文面から、森がいかに短期間に木村に影響を与えたかが伺える（太田, 1994）。

1871年（明治3年）12月3日午後4時30分、米船グレート・リパブリック号で横浜を出港した木村であったが、この一行には、のちの政界や教育界で活躍する西園寺公望、井上勝之助、大沢謙二、神田乃武、そしてホープカレッジで級友となる元佐幕派の大儀見元一郎（1845-1941）も同船していた¹⁸。乗組員を除き、日本人は37名が乗船しており、船酔いに苦しんだようである。「呉越同舟」という言葉があるが、数年前まで敵として戦ってきた者達が同船し、3週間余りを共にしたのは奇跡である。だが、誰もしがまだ見ぬ大国に夢を馳せ、やがて日本の一助にならんという高き志を持った人間達であった。

3.2. 留学中の木村熊二

一行は、同年12月27日、サンフランシスコに到着する。生まれて初めて見た蒸気機関車（木村の日記では「火輪車」）に乗り、最終目的地のニューヨークには1月8日に到着している。この間に起こったことについては筆まめな木村も殆ど何も日記に記録していないが、想像するに、見る物・触れる物、何もかもが珍しく筆舌に尽くし難かったのではなかったかと思われる。

ニューヨークには4日ほど滞在し、宣教師のフルベッキ（1830-1898）の斡旋で1867年に既に留学していた目加田種太郎と勝海舟の息子である勝小鹿と面会する¹⁹。しかし、「今後の行く末について話し合うも実らず」とあり、二人は留学先が決まらず、失意の内にいた。やがて目賀田から電報があり、会ってほしい人物がいるとの連絡を受けた。その時の出来事は木村から妻の鏡子へ送った手紙に詳しい。「目賀田事所々かけあるき、種々骨折候所、不計正月二十一日ニニューヨークニ而トクトル・ヘルプスと申人と出逢候よし、此人ハアルペニーと申場所の人なりしか、温厚実直の人ニ而学問も殊の外好く出来候ニ付、五、六年前政府より人選ニて、ミシカンといふ地方ハーランドなる一村を此人江預け、人民を教育被致候。此人ハーランドニ而学校を開き、窮民をすくい、多く徳行をほとこし候ニ付、一郷此ヲ仰く神の如しといふ」（太田, 1994）。

木村にとっては想像もつかなかった偶然の出会いだった。いや、運命的な出会いであった。ホープカレッジ（Hope College）初代学長のフィリップ・フェルプス学長（Rev. Dr. Philip Phelps Jr., 1826-1896）は、木村と大儀見のことを耳にし、面会を申し出て来たのだ。学長は二人の志を聞き、何とか力になりたいと申し出た。木村と大儀見は、前節のウィリアムソン夫妻のように支えてくれる人物に出会ったのである。この出会いがなければ、この若き元サムライ達は一年以内に帰国を求められていたことであろう。まさに天の配剤のような出会いであった²⁰。

機関車と馬車を乗り継ぎ、木村と大儀見は、1866年に開校されたばかりのホープカレッジのあるミシガン州ホーランド村（Holland）に到着した²¹。英語力不足を補うため、グラマー・スクールから始めた二人だったが、正式にホープカレッジ入学を認められたのは、3年後の1875年のことであった。木村は、大学と街の様子を日記に詳細に記している。ホーランドは当時4千人ほどの小さな村であったが、雰囲気も良く、学校の授業内容も充実していると記し、マーガレット・フェルプス学長夫人が子ども達をしっかりと教育していることに感心したこと何度も触れ、幼い頃から家庭で勉強と信仰について教わり、情緒豊かに自己表現している幼子達の姿に驚いている。家庭を守り、夫を支え、学長夫人としても多忙なフェルプス夫人であったが、木村が病気の時には我が子を扱うように親身に世話をし、「夜更かしは厳禁」と忠告する姿に、母親のような優しさと凛々しさを覚えていたようである。二人はフェルプス夫人のことを“our American mother”と呼んでいた。木村と大儀見は、学生寮と教室と食堂と図書室と学長宅が一緒になっていた Van Vleck Hall というひとつ屋根の下でかけがいのない時間を過ごす。木村と大儀見は、この場所、この学校、この町の人々にますます心が惹かれていくのであった²²。

日本で木村と大儀見の留学を支えていた勝海舟は、二人の渡米後も奨学金について静岡県と不断の折衝をしていた。『静岡県教育史』によると、浜松県分海外留学生徒の名簿に木村と大儀見の名が記されている。県費による渡米となっており、学科は語学、国名は米国、年限は5年、一年あたり洋銀400ドルの奨学金を受給と記されている。

この奨学金を受給したその日と同日の1872年3月23日に、木村はフェルプス夫妻から聖書を贈られている。「聖書と奨学金を同日に受け取ったのは、偶然にしては珍しい」と、木村は見えざる神の手を意識するようになる²³。ホーランド市は今もキリスト教信仰に篤い人々が多く暮らす街であるが、二人がいた当時は、信仰の自由を求めてオランダから移民してきた人々が住み始めたばかりの頃であった。日本は新政明治を迎えたものの、耶蘇教禁令の中で育った木村と大儀見にとっては、熱心なクリスチャン達の多いこの街を尊敬こそせよ、自分達にとっては異質な場所と最初は感

じていた。しかし、渡米の一年後、キリスト教信仰を持つ決断をする。その主な理由は、聖書的生活に生きる村人達とフェルプス学長夫妻の人柄と信仰を目の当たりにしたからに他ならない。日本の禁教下における信仰告白と受洗はかなりの覚悟だったと思われるが、同時にその背景には、二人を支えていた武士道の精神性にキリスト教の教えと通ずるものがあったことにもあるだろう²⁴。留学というものは、単に目新しいからということではなく、自らの価値観にさらに築き上げていけるものを見つける機会を与えてくれるものであることが分かる。

フェルプス夫妻が木村に残したものは学問と信仰のみではなかった。自らの生き方を通して教師としてのあるべき姿を示していた。ホープカレッジは度々経済的困難に見舞われた。その際に、学長が自らの月給を削って他教員に与えているのを知り、木村はこう記すのである。「余がフェルプス師において目撃せり、多年師に親炙したる人々も師が成功の時代よりは寧ろこの失意の時を見て師の常人にあらざることを感じたり。」この師の姿は、やがて木村が日本での教育において、学長として立つ時の大きな指針と生き様となるのである（木村熊二, 1900）。

歳月は流れ、8年経った1879年6月、木村と大儀見はホープカレッジを卒業することとなる。この時ともに、35歳であった。1879年は第6期卒業生を世に送り出すことになっていたが、その3分の1は日本人であることに地元民は驚いていた²⁵。卒業式において、木村は英語と日本語で答辞を述べ、大儀見はラテン語で答辞を述べる機会が与えられた。その答辞を聞いたアメリカ人の教員と学生達から、拍手喝采と花束が投げられるほどの反響を受けたとの記述がある（太田, 1994）。

卒業後の進路について、木村は大学院で工農を学ぶことが日本の近代化に努めることであり、基督者として神の栄光を表すことだと考えていた。大儀見の方は、天文学を極めたいと思っていたようである。そして、天文学を学んでいるうちに、これをキリスト教の弁証のために用いたいと考えていたようである。科学の分野に進みたいと思う二人に対し、フェルプス夫妻は、神学を勧める。日本における宗教事情を思い、この二人が日本で牧師となることを望んでいたのであろう。

留学の際に、天の配剤でフェルプス学長と出会った二人であったが、卒業後の二人の人生にも、神の見えざる手が見受けられた。木村と大儀見は大学院を目指し、別々に東海岸へと旅立つのだが、その途中、木村はホーランドから50キロほど離れたグランドラピッズ市に在住していたモオンダイクイ牧師（Rev. Meordiske）を訪ねた。翌日の日曜日の礼拝で聖餐式に与かった際、木村は不思議な体験をする。以下はその日の木村の日記である。「此際疾風迅雷の如き勢をもって余が上に襲ひ来たるものあるやうに覚えたるや、一種名状すへからざる感ありて余が神経の非常に過敏になりたるを知れり。パンを喰ひ杯に飲むの時は手は震へ口は噤し涕泗は横流して禁ずるを能わず、余をして或疾病の発作にあらざると疑わしめたり」（太田, 1994）。この時、木村は自らの進むべき道は一般の大学院ではないと悟り、ホープカレッジと同系列のオランダ改革派教会によって設立されたニューブロンズウィック神学校（New Brunswick Seminary）へ向かうのである。天より召命を感じた瞬間であった²⁶。

一連のことに鑑みると、不思議な神の導きとフェルプス夫妻の背後の祈りを感じざるを得ない。この二人が神学を学び、やがて牧師、教育者となることにより、新生日本での立ち位置が変わった。またこの先、天が用意した名脇役として用いられる人物が浮かび上がってくる。米国オランダ改革派教会外国伝道局総主事のフェリス氏と同教会宣教師のフルベッキ氏の存在である²⁷。

木村のニューブロンズウィック神学校での生活はどのようなものであったであろうか。神学修士の学びに苦勞をしていたことも見えるが、神学の学びそのものよりも東海岸の文化の違いと都会の殺伐とした人間関係に違和感を感じていたことが読み取れる。また、日本を長期に渡って離れて学ぶことが重く感じられ始めた様子も伝わってくる。

木村が英文で残している日記がある。1881年1月31日の記述を見ると、ホープカレッジにいた頃の経験とはかなり異なった様子が伝わってくる。“Monday 31 Weather cold, with snow. N.B. [New Brunswick] is like a desert where the seed of love has never been sowed; where beautiful flowers never smiled…” また、同年の3月14日には、“here in this lonely and strange home” とある。木村は病気がちで、ほぼ2週間おきに“I am not feeling well.” や “I am sick again.” と記している（東京女子医科大学附属比較文化研究所，1981）。また、金銭に関する記述が多く、食べ物や経済的にはかなり困窮していた様子が分かる。本校の学生が少なからず経験するように、新しい街で木村はホームシックを経験していたのかもしれない。

1882年5月、ついに木村は大儀見と共にニューブロンズウィック神学校を卒業することとなる。そして、木村は1882年6月4日に米国オランダ改革派教会外国伝道局総主事フェリス氏の協力により、正式な牧師となるための按手礼をニューブロンズウィック市の First Reformed Church で受ける運びとなった。木村は、1882年8月に改革派ミッション教師の資格で日本に帰国している。実に13年ぶりの帰国であった。渡米の際には刀を掲げてのサムライだった木村が、帰国時には聖書と教育への大志を掲げての帰郷であった。

3.3. 教育への情熱と帰国後の活躍

帰国後の木村は、怒濤のように変化する「明治」という時代の中で自分を取り戻すがごとく、様々な人物と精力的に交流を持つようになる。東京の上野に住居を構え、大学や塾を通じた教育と伝道に励んでいることが分かる。帰国後の日記は1882年の12月1日からほぼ毎日記されているが、深い交流を持った人物として、フルベッキ、奥野昌綱、田口卯吉、乙骨太郎乙、井深梶之助、植村正久、宮部金吾、巖本善治、勝海舟、津田仙、新島襄、海老名弾正、外山正一、小崎弘道、神田乃武、新島襄、内村鑑三など、教育界、政界、キリスト教界の著名なメンバーの名前が綴られている（木村熊二日記より）。

木村が帰国した1880年代はミッション系教育機関の開花時期でもあった。関西学院、東京英和学校（青山学院）、頌栄女学校、東洋英和女学校、共立学校（開成高校の前身）、愛知英語学校（現、名古屋学院）、金城女学校、スチール記念学校（東山学院）、明治学院が次々と開校された。そのような中、1885年9月に木村は、妻の鏡子、義弟の田口卯吉、植村正久、巖本善治らと念願の女子教育施設の「明治女学校」を開校するのである。教員として、津田梅子、若松賤子、島崎藤村、新井奥蘆、内村鑑三らの名前が挙げられている。女学校の設立は、まさに木村がアメリカ留学中に考えていたことの結実だった。フェルプス夫人やホーランドで暮らす婦人達がいかによく子供をしつけ、書を読み、家庭を助けているかということに木村は何度も触れ、「日本の女性は無学で、アメリカの女性と比べれば実に気の毒に思う」と妻への手紙の中で述べていた。これが、木村が女子教育に力を入れたいと思った原点であろう。明治女学校は、神の下で平等に扱われる教育を目指し、自主性を重んじた。会議には学生も参加し、寮も自治制だった。これにはホープカレッジから受けた影

響が多分にあると思われる（藤田，1984）。

木村は明治女学校の校長となり、鏡子は運営を任された。だが、運営だけではなく、寮で学生達と寝食を共にするなど、鏡子なくしては成り立たなかった女子教育であった。鏡子はこの他にも「矯風会」という倫理運動を始めた。女性の啓発、風俗改善運動を進めるためであった。熊二にとって鏡子の姿は、フェルプス夫人の勇ましさを彷彿させる姿ではなかつたらうか。明治女学校は、羽仁もと子や野上弥生子などを輩出している。

しかし、木村夫妻の輝かしい時間は長くは続かなかつた。1886年8月18日未明、鏡子はコレラのため没する。鏡子の死後、失意の中にいた木村には政界や財界からも話があつたが、息子の祐吉の問題などが浮上し、木村は東京を離れた場所での教育と伝道への召命を感じ始めていた。そのような折、長野県佐久郡の上田龍雄と小山太郎らに地方教育を勧められ、木村は長野県の小諸での私塾開校を考えるようになった。1893年に小諸義塾が開設され、1899年に県の認可を受けて中学校組織として認められることとなつた。英語、国語、数学、漢文、倫理、歴史、地理、理科、習字、図画、農学のクラスを網羅するまでに発展して行つた。授業には、分かりやすい国定教科書は採用せず、国語は古典を紐解き、漢学は漢詩を諳んじ、数学はガウスの対数表を使い、英語を学ぶのは原書からという徹底ぶりであつた（小諸義塾記念館の説明文より）。

島崎藤村が正式に小諸義塾の教師となつたのは1899年（明治32年）4月であつた²⁸。3年間の約束で義塾に来た藤村だったが、小諸行きを決めた理由は何だつたのだろうか。藤村は著述の中で自らをこう述懐している。「どうにかして、自分を新しくしたい。そう思っているところへ小諸義塾の話がありまして、木村先生からの手紙を受け取つたのです。」（島崎藤村「力餅」より）木村には、教育・牧会以外にも秀でた面があつた。小諸のりんご・苺・桃の栽培を手掛け、中棚鉦泉の開発、町おこしの活動も行つた。これらは木村の米国留学時代にアルバイト先の農家で学んだことが元となっているように思われる²⁹。

様々な方面で活躍を見せた木村だったが、日露戦争の影響による経済的理由などから、義塾はわずか13年で歴史の幕を閉じた。しかしその間、千名ほどの学生が学び、優秀な人物を各界に輩出した。多くが大学や大学院に進み、博士号を取り、医者となり、政界や文学界に上つた者、会社の重役になつた者などが続出した。その中で小諸義塾の卒業生について特筆すべきことは、教育者となる者が多くいたということである。木村熊二は1927年2月28日に天に召された。83年の生涯であつた。江戸、明治、大正、昭和という4つの時代を駆け抜け、サムライ魂をもってキリストに仕える牧師・教育者として自らを捧げ、日本とアメリカの架け橋となつた数少ない貴重な人物である。

木村と交流の深かつた内村鑑三は、尊敬する「武士の基督者」として、沢山保羅、新島襄、本多庸一、横井時雄の他に、この木村熊二を挙げている。内村は木村についてこう述べている。「…神もし赦したまわば、余自身もいつか君の例にならわんことを欲す」（写真2を参照）。日本を代表する基督者である内村が木村についてこのように述懐したことは、日本の近代教育史において非常に大きな意味を持つと思う。木村の功績を讃え、ホープカレッジの学内には木村のレリーフと肖像画が掲げられている。世界と日本との架け橋となる人材を輩出すべく留学プログラムを展開している神戸学院大学が、木村のような人材を輩出したホープカレッジでも学ぶ機会が与えられているのは幸いなことであると思う。



写真 2. 木村熊二の晩年の肖像写真と内村鑑三の寄稿（左）小諸義塾記念館前にて（右）（第一著者が現地で撮影）³⁰

4. 幕末における長州五傑と木村熊二に関する簡易年表

以下は、長州五傑と木村熊二及びその周辺の出来事に関する簡易年表である。犬塚（2015, p.157）は、1866年の山崎小三郎の死は「密航留学という行為が、「志」だけでは実行し難い、いかに至難の業であったかを証明している」と綴っている。当時、薩摩藩には資金力があつたが、長州藩にはそれ程の経済的余裕がなく、留学の成功には資金が欠かせなかつたことが記されている。なお、対立していた藩士同士がロンドンで交わることになり、彼らの競争意識が協働意識へと変わっていった。そして、藩の垣根を超えて国家としての視点にたち、祖国の発展と平和を祈りつつ物事を考えるようになったようである（犬塚, 2015）。1873年には、海外留学生規則が發布され、国費による文部科学省派遣留学の基盤が築かれることとなる（犬塚, 2015）。

表 1. 長州五傑と木村熊二に関する簡易年表（犬塚, 2015 ほか参照）

	長州五傑（英国留学）	木村熊二（米国留学）
1853	ペリー提督が黒船で来航。吉田松陰が米国への密航を企てるが失敗。	
1862	生麦事件勃発（攘夷思想が加熱）	
1863	長州五傑英国留学。英国公使館焼き討ち事件／薩英戦争で薩摩藩が敗北	箱館奉行支配定役となる
1864	伊藤と井上が帰国。下関戦争で長州藩が敗北。開国へと転じるきっかけに。	

1865	薩摩藩からの留学生 19 名が英国留学／長州から南貞助と山崎小三郎と竹田備次郎がロンドンに到着	歩兵指図役並等を任せられ、長州征伐に参加。勝海舟に仕え、新選組の近藤勇らと共に倒幕派の諜報活動を行う
1866	幕府イギリス留学生 12 名の派遣／山崎小三郎が肺病により死亡／一部の薩摩留学生在が帰国	京都取締役勤方を任せられる
1867	第 15 代将軍徳川慶喜により大政奉還	
1868	戊辰戦争勃発	
1868	長州五傑の残りの 2 名（山尾と野村）が帰国	彰義隊に加わり、敗走。静岡に移住
1870	山尾庸三、工部省の設立に貢献	勝海舟より奨学金を得、森有礼、外山正一、大儀見元一郎らと米国へ出発
1871	伊藤博文、岩倉使節団に加わり外遊 井上勝、工部大丞に就任	ホープカレッジのフェリックス学長と出会い、同大学グラマースクール入学 翌年、Hope Church で洗礼を受ける
1873	海外留学生規則を公布、耶蘇禁教令廃止	
1875	井上馨、三井物産の立ち上げに貢献	ホープカレッジ入学
1876	井上馨、日朝修好条規締結に関わる	
1879	伊藤博文、教育令発布に貢献	ホープカレッジ卒業 答辞を読む ニューブランズウィック神学校に入学
1881	遠藤謹助、造幣局長に就任	ニューヨーク大学で医学も学ぶ
1882	伊藤博文、憲法調査のため渡欧	ニューブランズウィック神学校を卒業 改革派宣教師の資格を受け日本に帰国
1883	井上馨、鹿鳴館を建設	旧約聖書翻訳事務委員となる
1885	伊藤博文、内閣総理大臣に就任 井上馨、外務大臣に就任 山尾庸三、法制局初代長官に就任	明治女学校開校。初代校長となり、巖本善治、津田梅子らと教育に従事する
1890	伊藤博文、貴族院議長に就任 井上勝、鉄道庁長官に就任	
1893	(1893 遠藤謹助 没)	長野県小諸市に小諸義塾を開校。初代校長になる。教員に島崎藤村など
1905	伊藤博文、韓国総監に就任 (1909 没) (1910 井上勝 没)	1906 小諸義塾、閉校となる。
1915	井上馨、没する。 山尾庸三、日本聾啞協会総裁 (1917 没)	
1927		83 歳の生涯を終える

*1866 年の幕府イギリス留学生派遣の 12 名においても 10 名が UCL で学んでいる (富田, 2005)。

5. 結語

以上、本稿では、英米留学の先駆者とも言える長州五傑（英国）と木村熊二（米国）を中心に彼らの留学の足跡を振り返った。島国に住む我々日本人にとっては、海を渡り遠い異国で学ぶことの意義と困難を改めて知らされた思いである。今回、本稿の執筆を通して、筆者らは留学の必要性を再認識した。特にコロナ禍で留学の機会を失った学生にとっては、体感として自らの見聞を広めることができず、世界を遠く感じたと話す卒業生もいた。コロナ禍が収束を迎えた今、本学部英語コース所属の学生に、さらに質の高い学びと留学プログラムを提供することにより、これからの日本社会を担っていく彼らを全身全霊で教育していきたい。

最後に、犬塚（2015, p.187）からの1節を紹介したい。「我らが意を得たり」と、筆者らも納得せざるを得ない一節である。

「国家の近代化という問題が、産業や軍事、科学技術の進歩ばかりでなく、そこに生きる人間自身の文明化にかかわる問題であることを、日本から来た留学生達の少なからぬ者たちが感じ取っていた。強い対外的危機感を抱いて西欧に渡った彼らがそこに見たものは、東洋とはまったく異質の人間観、倫理観であり社会観であった。これら西欧文明を支えている精神構造の本質を理解し、それを自己に帰属させた上で自らを文明化させることこそ、留学生に課せられた責務であると感じる者もいた」（下線は筆者らによる）

謝辞

本論文の内容は、第二著者の長期海外研究（於 英オックスフォード大学）の成果の一部でもある。ここに、学内外の関係者の皆様に感謝の意を記す。

注

- 1 英語コースでは、3年次に全員留学を実施している。また、学生は留学先で所定の単位を修めることが卒業要件の一部として課されている。
- 2 「協定あり」のみの留学生数で計算しても約4.5倍増加していることが分かる。
- 3 先人達の勇気、努力、功績等を讃える意味においても、その足跡をまとめることにした。彼らの大半は20代である。
- 4 UCLは第二著者が2004年にRichard Hudson名誉教授からの依頼を受け、当時のDepartment of Phonetics and Linguisticsで研究に励む大学院生の実験・研究協力者としてResearch Assistantを務めた大学でもある。この間に、同大学のPre-Master Courseも修了し、現在もEnglish Corpus LinguisticsやEnglish PhoneticsのSummer Course等に参加している。
- 5 2022年11月現在、Amazon Prime Videoで視聴可能である（有料タイトル）。
- 6 米国ホープカレッジは、第一著者が専任教員として勤務したりベラルアーツ教育を重んじる大学であり、第二著者も客員交換教授として所属した経験を持つ。
- 7 彼らの足跡を辿ることは、近年の世界に開かれた日本を知る上でも重要なことであろう。
- 8 部屋数の理由から、実際に自宅にホームステイしたのは3名で、山尾と井上はUCL近くのCooper家に滞在することになった（藤井, 1990）。
- 9 地元が山口県である安倍元総理は、講演の中で「国を強くするならむしろ世界に対して開くべきだと信じた慧眼（けいがん）の持ち主だった」と長州五傑を讃えた（日本経済新聞, 2014）。
- 10 記念碑にはUCL元副総長であるJohn White教授の俳句「はるばると ころもつどいて はなさかる」（When

distant minds come together, cherries blossom) が刻まれている (町田, 1998)。

- 11 大英図書館 (British Museum) にて、Mrs. Matheson ed. (1899) . Memorials of Hugh M. Matheson. Hodder and Stoughton. を拝読する機会があったが、書物自体がかなり傷んでいた。
- 12 南出 (1998) によれば、英和辞典の原点が『諳厄利亜語林大成』(1814) なのか『英和对訳袖珍辞書』(1862) なのかには議論が分かれることを指摘した上で、『研究社新第英和辞典』(1960) の序文の記載文「わが国における最初の英和辞典は堀達之助等編纂の『英和对訳袖珍辞書』で文久2年(1862)即ちペルリ上陸後9年、今を去る91年前に出版されたのである」を紹介している。『英和对訳袖珍辞書』(1862)の方が今日の英和辞典の内容に近いことも指摘している。
- 13 1864年度の分析化学のクラスでは、山尾は全体で4位という優秀な成績を取めた (犬塚, 2015)。
- 14 藤井 (1990, p.84) によれば、「化学のうち、まず分析化学を履修したという点は、英語力が十分ではないので講義形式ではなく実習方式の方が適当であると判断されたものと推測される」とある。
- 15 <https://brookwoodcemetery.com> (Yamazaki Kosaburo, Arifuku Jiro, Fukuoka Morito and Fukuro Kuhei)
- 16 鏡子の弟に、『日本開化小史』を著し、渋沢栄一と大蔵省翻訳局に務めた田口卯吉がいる。
- 17 文部科学省の記録では、明治元年から五年までに渡米した者は500名に達していた。 https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317601.htm
- 18 大儀見は帰国後、牧師、教育者として活躍し、日本最初のギリシャ語辞典を編纂する。
- 19 フルベッキはオランダで生まれた。Guido Herman Fridolin Verbeckの本名を持つが、宣教のために本国を長く帰国できなかったため、国籍を失った。いくつかの藩校で教鞭を執り、勝海舟、西郷隆盛、大隈重信らにも多大な影響を与えた人物である。明治学院大学の理事長、旧約聖書翻訳の委員でもあり、担当した「詩篇」の日本語訳は比類なきほど美しい文体である。
- 20 この時期にフェルプスがニューヨークを訪れていたのは、開校したばかりのホープカレッジの財政支援を求め、出身の州に戻ってきていたこともあったが、学長が若い頃に宣教師としてアジアに渡る夢を持っていたことにも関係がある。
- 21 Hollandは、本国オランダから信教の自由を得るために移住したAlbertus van Raalte牧師のグループによって1847年に創立された。「(「ホランド」と「ホーランド」という2つの表記があるが、ここでは後者を採用している。) Hope Collegeは、神への希望を忘れないことを目指し、旧約聖書の詩篇42:5にある「"Spera in Deo" (Hope in God)」をモットーとしている。
- 22 Van Vleck Hallには後に多くの日本人が住むようになり、現存は学生寮のみとなっている。
- 23 日本からの奨学金は1873年の7月まで継続されたが、廃藩置県の影響で継続不可となり、それ以降は私費留学に切り替えざるを得なくなった。この時、木村と大儀見は静岡県産の帰国者リストに入っていたが、フェルプス学長がワシントンの日本公使館に赴き、特別在留許可を得られるよう熱心に交渉していた。この後、二人を支える奨学金は、フェルプスの知り合いや篤志家達によって賄われることとなる。
- 24 1872年に二人はHope Churchで洗礼を受ける。その受洗名簿が今も教会に残っている。
- 25 全卒業生は6人だけであり、そのうちの二人が日本人の木村と大儀見であった。
- 26 不思議なことであるが、大儀見も同時期、木村と似た経験をしている。大儀見はジョンズ・ホプキンス大学で科学を学ぶことになっていたが、途中、オハイオ州のクリーブランド市にある教会に立ち寄った。牧師の説教を聴きながら、「神学こそ我に与えられし天の召命」と感じ、プリンストン神学校に向かった。そこで一年間学んだ後、1881年2月に木村と同じニュージャージー州にあるニューブロンズウィック神学校に入学した。
- 27 アイザック・フェリス氏 (1798-1873) はニューヨーク大学の総長であり、牧師でもあった。フルベッキやブラウンを日本に宣教師として送った。木村と関わりがあるのは息子のジョン・メイソン・フェリス氏 (1825-1911) である。1871年に岩倉使節団は彼の功績に感謝状を送っている。横浜にある「フェリス女学院」は、フェリス親子の貢献によって命名された。
- 28 島崎藤村は共立学校の学生時代、恩師であった木村から洗礼を受けている。藤村にとって木村は、師であり、牧師であり、父親のような存在であった。
- 29 4月20日は「ジャムの日」として知られているが、それは小諸出身の塩川一郎が苺ジャムを明治天皇に献上したことを始まりとしている。その塩川や小諸の農家に苺や桃の栽培を指導したのが、木村熊二であった。

- 30 小諸市立小諸義塾記念館は、小諸義塾の本館校舎を1994年に移転改築して設立された記念館で、小諸駅から徒歩3分の所に位置する。木村熊二や島崎藤村に関する資料が豊富で、当時、教室として使われていた部屋も残っている。

参考文献

- [1] Embassy of Japan in the UK. (2015). 150th Anniversary: Satsuma Students. Embassy of Japan in the UK. Retrieved from <https://www.uk.emb-japan.go.jp/en/webmagazine/2015/03/satsuma150.html>
- [2] Mrs. Matheson (ed). (1899). *Memorials of Hugh M. Matheson*. London, Hodder and Stoughton.
- [3] 青山なを (1962)、「木村熊二と島崎藤村」、『比較文化』、8、1-34
- [4] 青山なを (1970)、『明治女学校の研究』、青山なを著作集第二巻、東京、慶應通信
- [5] 犬塚孝明 (2015)、『アレキサンダー・ウィリアム・ウィリアムソン伝』、福岡、海鳥社
- [6] 大川公一 (2018)、『青春小諸義塾 サムライ教師と未来の学校』、長野、信濃毎日新聞社
- [7] 大槻文彦 (2022)、『復軒雑纂1』、東京、平凡社
- [8] 太田愛人 (1979)、『明治キリスト教の流域 — 静岡バンドと幕臣たち』、東京、築地書館
- [9] 太田愛人 (1994)、『大儀見元一郎とその時代 — 侍から牧師へ・一幕臣の軌跡』、東京、新教出版社
- [10] 外務省 (2014.5.1)、「安倍総理大臣の日英研究教育大学協議会への出席及び長州ファイブ記念碑視察」、『外交政策』 https://www.mofa.go.jp/mofaj/erp/we/gb/page24_000264.html
- [11] 菊池好行 (2020)、「ウィリアムソンと日本人学生たち」、『化学と教育』、68/9、8-11
- [12] 小山周次 (1996)、『小諸義塾と木村熊二先生 - 伝記・木村熊二』、東京、大空社
- [13] 静岡県立教育研修所 (1973)、『静岡県教育史上巻』、静岡、静岡県教育史刊行会
- [14] 下山嬢子 (2016)、「木村熊二の足跡：その基督教＜回心＞及び小諸移住について」、『日本文学研究誌』、13-14、1-18
- [15] 島崎藤村 (1979)、『力餅』、(藤村童話 第4巻)、東京、筑摩書房
- [16] 鈴木直枝 (2006)、「明治前期における女性の手紙文 — 木村熊二・鏡子往復書簡の検討」、『東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部紀要』、37、57-64
- [17] 大和日英基金 (2016)、「薩摩藩英国留学生の150周年」、Retrieved from <https://dajf.org.uk/ja/news/>
- [18] 高塚暁 (1989)、『小諸義塾の研究』、東京、三一書房
- [19] 東京女子医科大学附属比較文化研究所 (編) (1981)、『木村熊二日記』、東京、東京女子医科大学附属比較文化研究所
- [20] 東京女子医科大学附属比較文化研究所 (編) (1993)、『木村熊二・鏡子往復書簡』、東京、東京女子医科大学附属比較文化研究所
- [21] 独立行政法人日本学生支援機構 (2022)、「2020 (令和2) 年度日本人学生留学状況調査結果」、Retrieved from <https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/nippon/data/2020.html>
- [22] 富田仁 (2005)、「海を越えた日本人たちの系譜」、『海を越えた日本人名事典新訂増補』、3-36
- [23] 中島耕二 (2003)、『長老・改革教会来日宣教師事典 (日本キリスト教史双書)』、東京、新教出版社
- [24] 並木張 (1996)、『島崎藤村と小諸義塾』、長野、櫟
- [25] 日本経済新聞 (2014年5月2日)、「首相、幕末の留学生記念碑を訪問 UCL 構内」、Retrieved from https://www.nikkei.com/article/DGXNASFS02005_S4A500C1EAF000/
- [26] 藤井泰 (1990)、「山尾庸三とユニバーシティ・カレッジ」、『英学史研究』、22、77-89
- [27] 藤田美実 (1984)、『明治女学校の世界—明治女学校と「女学雑誌」をめぐる人間群像とその思想—』、東京、青英舎
- [28] 放送大学 (2013)、「ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ (UCL) と日本人留学生—長州五傑と薩摩藩留学生の記念碑—」、『所長室コーナー』、Retrieved from <https://www.sc.ouj.ac.jp/center/hiroshima/news/2013/09/18124500.html>
- [29] 町田善正 (1998.5.2)、「エーザイロンドン研究所」、『Medicine News』、6-8
- [30] 南出康世 (1998)、『英語の辞書と辞書学』、東京、大修館書店